

矢取娘

野村胡堂

—

「親分、折角ここまで来たんだから、ちよいと門前町裏を覗いて見ましようか」

銭形平次と子分の八五郎は、深川の八幡様へお詣りした帰り、フト出来心で結改場けっかいば（楊弓場）を覗いたのが、この難事件に足を踏込む発端でした。

「何んだ、ここまで俺を引張って来たのは、信心気かと思つたら、そんな企たくらみだったのかい」

「でもね、親分、楊弓は悪くありませんよ。第一心持が落着いて、腹が減って、武芸のたしなみにもなろうてエわけのもので」

「馬鹿だなア」

「へエ」

「そんな能書を並べるより、矢取女に良いのがいるとか何んとか言った方が素直で可愛らしいぜ。第一その上落着いて大食いをされた日にゃ、米が高くなつて諸人の迷惑だ」

「悪い口だなア、親分」

「ところで、その八五郎が武芸のたしなみを見せようという相手のところへ真つすぐに案内しな」

そんなことを言いながら、二人は軒並の楊弓場を覗きながら、入船町の方へ歩きました。

「おや、変ですぜ、親分」

「人の出入りが多いようだな、何か間違いがあつたんだろう」

「お千勢ちせの家ですよ。隣のお秀と張り合つて、この土地では一番の人気者だが

「たいそう詳しいんだな。それもたしなみの一つかい、八」

「へッ、^ま先ず、そんなことで」

お千勢の家というのは、土地で一番繁昌している矢場で、娘のお千勢の外に、矢取女が三人もいる構えでしたが、近寄って見ると表戸を締めたまま、緊張した顔の人間があわただしく出たり入ったりしております。

「おや、洲崎の兄^{あにい}哥」

平次は早くも、土地の御用聞洲崎の金六を見付けました。

「お、銭形の」

中年男金六の顔は少し酔っぱくなります。

「何にかあったのかい」

「なアに、ちよいとした殺しさ。——銭形の兄哥はどうして嗅ぎ付けたんだ。

——鼻が良過ぎるぜ」

金六の調子には少し反感の響きがあります。

「兄哥の前だが、深川の殺しが神田まで匂うような南風みなみは吹かないよ。——八幡様へお詣りして、ちよいと矢場を覗いただけのことさ。殺しがありやちようど幸いだ、八の修業に兄哥の調べ振りでも見せてやってくれ」

平次はさり気なく事件に飛び込みました。

「今度のは、鎌鼬かまいたちや自害じゃないぜ」

嫌味を言いながらも、金六は二人を現場に迎え入れる外はなかつたのです。

（『お藤は解く』第三卷参照）（編注）

その頃の結改場けっかいばは、裕福な町人たちの楽しみ場で、矢取女に美しく若いのを置きましたみだが、決して淫らな場所ではなく、平次が盛んに働いている頃は、今日では想像されないほどの繁昌を見ていたのでした。

二尺八寸の極めて小さい弓——

それを継弓にして、きんらん金欄の袋などに入れた、贅沢な道具を持った旦那衆が、美しく彩色を施した九寸の朴ほおの木の矢で、七間半の距離から三寸の的を射て、その当りを競って楽しんだのです。

矢場が魔窟まくつになったのは、天保以後から明治にかけてのこと、じょうききょう貞享、元禄、享保——の頃は、なかなか品格の高い遊戯で、矢取女も後の矢場女のようなものではありません。

お千勢の矢場というは、お千勢の母親のお組がさいはい采配を揮い、娘のお千勢の愛嬌を看板に、この二三年めきめきと仕上げた店でした。



「この通りだよ、錢形の」

店も奥ありません。入るとすぐ矢場で、僅かばかり敷いた畳の上に、若い女の死体は横たえてあるのです。

死骸の側に身を俯向けて、ヒタ泣きに泣き入るのは母親のお組でしょう。三人の若い矢取女は、どうしていいのか見当も付かぬらしく部屋の隅っこに額を鳩^{あつ}めて、脈絡もないことをヒソヒソと話している様子です。

平次は進み寄って、死骸の上に掛けてあるものを取りました。

「あッ、お千勢」

後ろから差し覗くガラッ八が、思わず頓狂な声をあげたのも無理はありません。たしなみの良い娘の死骸は、半身紅^{あけ}に染んで、二た眼と見られない痛々しい姿ですが、よく化粧した顔は白蠟^{はくろう}のように蒼染^{あお}んで、何んとなく凄まじい美しさがあるのです。

「虐^{むじ}たらしいことをするじゃないか。殺す相手にことを欠いて、こんなに若く
て綺麗なのを——」

金六は口惜しそうに言いながら、娘の死骸に布^{きれ}を掛けてやります。

「傷は後ろだね」

「左肩胛骨^{ひだりかいがらほね}の下、短刀で深くやられている。一とたまりもなかったらうよ」

「どこでやられたんだ」

「三十三間堂の裏さ。——ゆうべ出たつきり一と晩帰らなかつたそうだ。今朝
になって往来の人が騒ぎ始めたんだ」

そう言いながら金六は自分の話の確実性を保証するように、泣きじゃくりな

がらうななく母親のお組を顧みるのでした。

「一番先に見付けたのは？」

「それが解らないのさ。何しろ人通りも弥次馬も多い場所だから」

「ゆうべ何んの用事があつて出かけたんだ」

平次はなおも突っ込みました。

「呼出しが掛つたらしいんだよ」

「どこから、——誰か手紙でも持って来たのか」

「それが解らないから不思議さ。ゆうべは珍しく客もなかつたそうだし、使い屋も、人も何んにも来ないって言うんだ。ね、それに違いあるまい」

「ハ、ハイ」

お組は涙を押し拭いながらうななくきました。

「月はなかつた筈だし、あの辺は淋しいから、若い女一人で行く場所じゃねエ。

よくよくの用事か、でなきや——」

金六もそこまでは考えているのでした。

「前からの約束か、当人同士の合図で呼出したんだらう。いずれにしても、十三間堂裏へイキの良い若い女を誘い込むのは、一と通りの仲じゃあるまいよ」
「俺もそれを考えているんだ」

平次に説き進められると、金六はあわてて自分の立場の弁護をするのでした。
「お千勢はゆうべ変った素振りはなかったのかい。宵のうちから、いつもになく浮かれるとか、はしゃぐとか、萎しおれているとか、心配そうにしていたとか——」

「いえ、そんなことはありません」

平次の問いを、母親のお組は強く否定しました。

「それじゃ、前からの約束じゃあるまい。お千勢を合図一つで呼出せる相手を

捜すんだね」

平次の言葉には、何やら深い含蓄がんちくがありました。

「俺もそれを考えているんだ」

金六はまだそんなことを言っているのです。

「それじゃ俺は帰るぜ、飛んだ邪魔をしたな」

平次は八五郎を促うながして外へ出ます。

「ちよいと待ってくれ、銭形の」

「何んだい」

「兄あにい哥の見込みを聞かしてくれ」

金六は女達の手前、大きな口をききましたが、ここで銭形の平次に見放される心細さを考えないわけには行きません。

「見込みというほどのこともないが——。あの傷口の様子じゃ、前から抱きす

くめるように、お千勢の後ろに手を廻して突いたんだと思うよ。刃が横を向いて平たいらに入っているだろう」

「フム」

「合図でお千勢を呼出せる人間——お千勢に抱き付かれるほど仲の好い人間を捜すんだ」

「フーム」

「合図は矢取女たちが知ってるに違いない。かかり合いが怖くて黙っているんだ。若い苦労人の女はそんなことに抜かりがある筈はないよ」

「有難う。それだけ聴けば、下手人は挙げたも同然だ。さすがに銭形の兄哥は目が高いや」

金六は平次に競争心がないと見ると、中年者らしく露骨な世辞などと言うのです。

平次はそれつきり事件を忘れてしまいました。お千勢殺しの凄まじい情景を思い起すことがあっても日々の新しい御用に追われて、それはもう、遠い遠い昔の出来事のような気がしていたのです。

「親分、大変なのが来ましたよ」

ガラツ八の八五郎は、敷居際に声をひそめて、尾籠びろうな腰になりました。入口には女の客が来たらしく平次の女房のお静が物柔かに掛け合っております。

「大変なものには慣なれているよ。大家に酒屋に米屋、——それに横町の金貸しさ。それにしちやまだ晦日みそかには早いようだが」

五月の十三日、青葉が眼に沁むような初夏の清々しい日です。

「そんなんじやありませんよ。深川の門前町裏の——お秀ですよ」

「何んだい、そんな女からは不義理の金なんか借りた覚えはないよ」

「そうじゃありませんよ。——それ、この間殺されたお千勢の隣の矢場の娘で」

「何んだ、それじゃお千勢殺しの一埒ちうがこんがらかつて、金六兄哥が持て余したんだらう」

そんな話をしているところへ、お静は若い娘を一人案内して来ました。せいぜい十九か二十歳、殺されたお千勢よりは一つ二つ若く、矢取女にもこんなのがあるか知らと思うような、世にも浄きよらかに、なよやかな感じの娘です。

「親分さん、お願いでございます」

「どうしたというのだ」

いきなり身を投げかけるような、純情な娘の願いを、聴かぬ先から平次は少したじろぎました。

「若旦那を助けて下さい。あの人はそんな悪いことのできる人じゃありません」
「若旦那？ どの何んという人で、何うしたんだ」

「山城屋の若旦那、紋次郎さんが、お千勢さんを殺したなんて、そんな恐しいことがあるものですか」

お秀はそう言うのが精一杯で、あとは身を揉んで泣くのです。

「洲崎の金六親分が、その紋次郎とか言うのを縛ったというんだらう」

「え、——合図をしてお千勢を誘い出すのは、若旦那の外にはないって言うんです。でも、若旦那の合図なら、私だって知っています。小石を拾って、羽目板を三つずつ二度叩くんです。それが三十三間堂の裏へ来いという——」
そこまで言ってお秀はフト口を緘つぐみました。さすがに端はしたなさに気が付いたのでしよう。

「どうしてお前はその合図を知っているんだ」

「お秀は黙ってしまいました。心持頬を染めて、俯向いた首筋のあたりの美しさ。

「親分」

ガラッ八は後ろから平次の袂たもとを引きました。

「黙っている。——木場の兄哥のすることにケチを付けちゃならねえ」

「いえ、洲崎の金六親分さんは、若旦那を助けたかったら銭形の親分をお願いして見ろ。若旦那を縛ったのは銭形の親分の指金だから——って仰しゃるんです」

「それは本当か」

平次もちよつと面喰いました。洲崎の金六がそんなことを言うのは、一応人の悪い皮肉とも聴えますが、事實は下手人として挙げた山城屋の紋次郎が、証拠が揃いながら、どうやら下手人らしくないので、それとはなしに、平次に助

力を頼み、何とか事件の恰好をつけようというのかも知れません。

「私がここへ来るのも、金六親分さんはよく知っている筈です」

「それじゃ、ともかく行って見よう」

平次はようやく御輿みこしをあげました。

「有難てえ。そう来なくちゃ面白くねエ」

八五郎の有頂天さ、平次の履物はきものを揃えたり、十手を懐ろにねじ込んだり、滅茶滅茶に動いております。

四

深川へ行つて見ると、事件は想像以上にこんがらかっておりました。

お秀に別れて門前町の番所へ行くと、ちょうどいあわせた洲崎の金六が、

「お、銭形の、来てくれたか。兄哥あにいのお蔭で飛んだ目に逢ったぜ」

そう言いながらも、救われたような顔になるのです。

「山城屋の若旦那とかを挙げたそうじゃないか。それが下手人じゃないと言うのかえ」

「お千勢ちせと言ひ交した男だ。深川中で二人の仲を知らない者はないよ。合図一つでお千勢を三十三間堂裏におびき出したり、抱き付いて来るのを、後ろからあいくちヒ首で刺すのは、紋次郎の外にないと見たのさ」

「それが——？」

「困ったことに、その晩紋次郎は町内の風呂へ行つて帰ったきり、一と足も外へ出ないと言うんだ。本人がそう言うばかりじゃない。店中の奉公人の口が揃うから嘘じゃあるまい」

紋次郎は黒江町の呉服屋——山城屋の一人息子で、山城屋は番頭小僧の七八

人も使っている老舗しにせでした。

「フォーム」

平次はうなずきました。

「あんなのを送った日にゃ、八丁堀の旦那衆から、どんなお小言が出るか判らない。業腹ごうはらだがとうとう縄を解いて了ったよ」

「何時？」

「ツイ先刻さ」

「そいつは気が早い。が、まあいいや。もういちどやり直して見よう」

「銭形の兄哥が知恵をかしてくれさえすれば、どうにかなるだろう。じゃ頼むぜ」

この四五日の心労と、八丁堀の激励に、金六はすっかり我を折っている様子です。

お千勢の家へ行つて見ると、店だけは開けておりますが、まだ客は一人もなく女主人のお組と三人の矢取女は氣抜けがしたように平次と金六を迎えました。

「少しは落着いたかえ、お神さん」

「へエ」

「氣の毒だったなア。——こんなことを言つても何んにもなるまいが、あまり氣を落さない方がいいぜ」

平次の調子はしんみりしております。

「有難うございます。親分さん」

お組はもう涙ぐんでいるのです。

「お千勢はあんなに綺麗だったから、いずれ何んとか言う人も沢山あったことだろう」

「え、でも、身持の堅い娘でしたから」

母親にはそう見えたのでしよう。

ガラツ八が集めて、平次の耳に聴えた情報では、お隣のお秀と張り合つて、とうとう紋次郎を捲り取つたと言つたような凄い話もあつたのです。

「夜分に家を明けるようなことはなかつたのか」

「え」

お組の答えは妙に濁つておりました。

矢取女三人は、おさの、お民、お銀と言つて、十六から十九まで、お千勢ほどではなくとも、かなり容貌きりようを揃えてあるのは、さすがにこの土地の矢場で、第一等の繁昌を誇るだけのことはあります。

三人は口を揃えてお千勢と紋次郎の仲を承認し、お隣のお秀との間柄も否定はしませんでした。

合図のことも押して訊いて見ると、みんな承知で、その晩も、お勝手口の羽

目を小石で叩く音を聞くと、お千勢はいてもたってもいられないらしく、間もなくいそいそと夜の町へ出て行ったと言うのです。

三人の矢取女はお互に見張っているのです、誰も外へ出たものはなく、これはお千勢の死と絶対に関係がありません。

「他にお千勢か、お前を怨む者はないのかえ」

平次はお組に戻りました。

「ないとも申されませんが」

「例えたとば？」

「お隣の半助さん父娘もよくは思っていないことでしょう。私の家がこの通り運がいいのに、半助さんが長患ながわずらいで、むずかしい顔をしているせいか、お隣はだんだんさびれて行って、今では矢取女もなく、娘のお秀さん一人でやっている有様ですから」

「おや」

平次は聴耳を立てました。隣の家——半助、お秀父娘の家から、何にか女の泣声らしいものが聞えるのです。ガラッ八の八五郎はさっそく飛んで行きましたが、やがて帰って来ると平次の耳に口を寄せて囁くのです。

「父娘喧嘩ですよ。お秀が親父に黙って親分を迎えになんか行つたのが半助に気に入らなかつたんで」

「そうか、ちよいと行つて見よう。お秀が可哀想だ」

平次は金六に眼配せすると、壁隣りの半助父娘の家へやっつて行きました。

五

「あ、錢形の親分さん」

娘を折檻せつかんしていたらしい半助は、あわてて素裕すあわせに膝ひざつ小僧を包みました。

五十を少し越したらしく、ひどい喘息ぜんそくで、秋から春へかけては一と足も外へ出られず、見る蔭もなく痩せている上、近頃は足の病気を起したそうで、全く気の毒な姿です。

「俺をどうして平次と知ったんだ」

平次の問いは唐突でした。

「銭形の親分さん知らない者は江戸中にありません。それに、後ろから洲崎の金六親分が附いて来るんですから、大概たいがい見当は付きます」

「そうか。——そんな事はどうでもいいが、可哀想にお秀は泣いてるじゃないか。何が気に入らなくて折檻しているんだ」

「親分の前ですが、若い者のすることは気に入らないことばかりですよ」
半助はすね者らしい眼を光らせました。

「お秀が俺を呼んだのが、気に入らないと言うんだらう」

「飛んでもない。銭形の親分さんが来て下されば、深川中夜が明けたように明るくなります」

「巫山戯ふざけちやいけねえ」

「全くですよ、私はお世辞なんか言やしません。私の気に入らないのは、娘のお秀が、何時までも山城屋の若旦那を忘れ兼ねて、余計なことをするからでございます」

「すると、山城屋の紋次郎が無実の罪で処刑になる方がよかったのか」

「飛んでもない、——無実の罪なものですか。合図をしてお千勢をおびき出すのは、山城屋の若旦那の外にあるわけはありません」

「山城屋の若旦那がお千勢を殺すわけではないじゃないか」

「お千勢は確しつり者ですから、何時までも若旦那の慰みものになっている筈はあ

りません。嫁にしてくれとか何んとか手詰の強談を持ち込んだのでしよう」
「そんなこともあるだろうな。ところで、お前はひどく弱っているようだが、外へは出られないのか」

平次は妙なことを訊きます。

「青葉の時節になると、持病の喘息も少しはよくなりますが、この春から瘡毒そうどくで足が立たなくなりました。柱につかまっつて、家の中を歩くのが精一杯です」

さすがに氣丈者の半助も眉を垂れます。

「ところで、お千勢が殺された晩のことを、詳しく聴きたいが、お秀は何んにも気が付かなかつたのか。お隣の裏口で合図した人間とか、お千勢の出て行った様子とか——」

平次はお秀の方に話を向けました。

「いえ、何んにも」

「この娘は、あの晩小田原町の叔母のところへ手伝いに行つて泊つてしまひましたよ。何んにも知つてるわけはありません。私は戸を締めて早寝をしてしまつたし」

「小田原町の叔母というのは？」

「相模屋さがみという豆腐屋とうふですよ」

平次が眼配せする迄もなく、ガラツ八の八五郎は横つ飛びに小田原町へ飛んで行きました。

「この家の裏はすぐ川なのかい」

「へエ、楊弓の客は少なくなるばかりですから、釣舟屋でも始めようかと思ひましたが、足腰がきかなくなつちや、それもいけません」

欄干らんかんに凭もたれて覗くと、型ばかりの釣舟が一隻、上げ潮に揺られてお勝手寄りの柱つなに繋がれてあります。平次と金六はそこから黒江町の山城屋まで延ばしま

した。

間口六間、二た戸前の土蔵を後ろに背負った、界隈一番の呉服屋で、世間体をはばかって裏からそつと訪れた平次と金六は、ていねいに奥の座敷に通され、何にか腫物はれものにさわるような扱いです。

「親分さん方、飛んだお手数をかけます」

父親の紋兵衛は六十前後、思慮も分別も申分がない仁体にんていですが、倅の不心得から、御用聞にたびたびやって来られるのだけは、我慢のならぬ屈辱くつじよくを感じる様子です。

「若旦那に逢いたいが——」

「へエへエただ今、呼んで参ります」

紋兵衛が何やら小僧にささやくと、縄を解かれた紋次郎は、小僧と入れ違いに入って来て、父親の後ろに小さく坐りました。

二十四、五、典型的な若旦那で、撫で肩の色白、肉の薄い、気の弱そうな、虫も殺せそうもない男です。

「飛んだ災難だったね。これに懲りて、矢場なんかに入り浸らない方がいいぜ——ハツハツ、俺も、こんな意見がましいことを言うようになったかなア」
平次はそう言って面白そうに笑うのです。

「——」
紋次郎は女の子のように、深々と襟へ顎を埋めました。

「お前さんは、お秀とお千勢と、どっちが好きだったんだ」
変なことを平次は訊きます。

「——」
紋次郎は答え兼ねている様子です。

「お千勢と夫婦約束でもしたんだろう」

「どうしても、そうしなきゃならなかつたんです」

気の弱そうな紋次郎、こう言うのさえ精一杯の努力です。

「そんなことだろうな。お秀の方に未練があるが、お千勢にからかつたのが祟たたつて、お千勢の母親が手を引かせないように仕向けたんだらう」

紋次郎はうなずきました。お秀の臍ろうたけた美しさと、お千勢母娘のやり手らしい様子を比べて、平次はもうこれだけの判断をしていたのです。話が混み入つて来ると、平次は父親の紋兵衛に遠慮して貰つて、紋次郎の口から、根こそぎ遠慮のない事情を話して貰いました。

それによると、紋次郎とお秀は二年も前から許し合う心持になつていたのを、隣のお組お千勢母娘が口惜しがって紋次郎が浮気心で、たった一度お千勢にからかつたのを質に取り、逃げ腰になると「父親に言い付けてやる」と言つたよおとうな甘口な脅かしで繋いで、とうとうお千勢との間を割くことのできないもの

にして了ったのです。

紋次郎は柄にも年にも似た大の浪漫主義者で、お秀と逢う時からいろいろ合図を定め、相手がお千勢に変わっても、毎日逢う者に手紙を書いたり、妨さまたげるものもないのに、合図で呼出したり、夢のような遊戯に溺れる癖がありました。

「でも、あの晩のは私ではございません。私は明るい中に風呂へ行つて来て、それからズーツと店にいたことは、店の者もお客様も町内の方もよく御存じます。後はみんなといっしょに寝てしまいましたが、夜中に抜出さなかつたことも、店中の者がよく知っております」

そう言う言葉に嘘があるとも思われません。これ以上調べることもないので、二人は物足りない心持で外へ出ると、

「あ、親分、ここでしたか」

ガラツ八の八五郎が息せききつて帰つて来ました。

「どうした八、小田原町の豆腐屋は」

「半助の言った通りですよ。あの昼、法事の注文を二つ引受けて、姪のお秀まで手伝って貰ったが、夜明しをする忙しさで、お秀は一と足も出なかったところ言うんで」

「成程な」

平次はすっかり考え込んでしまいました。

「銭形の兄哥、こいつはどう言うことになるんだ」

金六は悲鳴をあげます。紋次郎もお秀も下手人でなく、お組母娘を怨んでい
る半助が、あの通り外へも出られない容体では、お千勢殺しは全く見当もつか
なくなるでしょう。

「お千勢は間違いもなく人手に掛って死んだ。——合凶に誘われて行って、月
明りの中で何にかを見たに違いない。近所の衆が何も聴かなかったところを見

ると、不意に抱き付いて刺されたのではなくて、お千勢の方で見知り越しの間を助け起そうとしたに違いない。——ところが相手はお千勢を殺す気で待っていたんだ。いきなり抱き付くようにして後ろから刺さしたんだろう」

「すると？」

「いちばん怪しいのはやはり半助だ。娘のお秀が紋次郎に捨てられて泣いている——お千勢の母親お組が商売上手で、半助の矢場は見る見る寂さびれて行く——ツイお千勢を殺す気になりはしないかな。——自分はどうせ足腰も立たない上、この先長く生きそうもない身体だ。お千勢さえなくなれば紋次郎の気が変わって、末長くお秀の世話を見てやる気になるかも知れず、お組の矢場の繁昌もこれきりになる」

平次の想像は思わぬ方に飛躍して行きます。

「あの足で？」

「隣の裏口へ行つて、小石で羽目を叩くくらいのことではできるだろう」

「三十三間堂の裏へは」

「舟というものがある。自分の家の裏から釣舟に乗つて、汐見橋の下をくぐれば、すぐ三十三間堂だ。——半助は權かゐが自慢だろう、釣舟屋を始めたいと言つていたくらいだ。——三十三間堂へ這い上がつて打ちのめされたように倒れてゐるのを、顔見知りのお千勢が見付けて抱き起した。——そこを——」

「それだッ」

金六は飛び上がりました。こう言われるともう疑う余地もないような気がするのです。

「待つてくれ、金六兄哥。急いで縛つて、また紋次郎の二の舞をやっちゃ恥の上塗りだ」

平次は辛くもはやる金六を止めました。

六

翌朝、洲崎の金六の使いが、神田の平次の家へ飛んで来ました。

「大変、親分。半助が殺されましたぜ」

「えッ」

平次もこの時ほど驚いたことはありません。昨日は半助をお千勢殺しの下手人と睨んで、金六の手柄にさせる心算つもりで帰って来たばかりです。八五郎をつれて三人、深川へ駆け付けた時はもう昼近い頃。

「銭形の、——また違ったよ。今日は半助を挙げるつもりで、証拠を揃えて手ぐすね引いているとこの騒ぎだ」

金六はもつての外の機嫌です。

「ゆうべ縛っておけば、半助は殺されずに済んだかも知れない、——が」
紋次郎を縛って縮尻しくじった金六の面目はどうなるでしょう。

「まア、入って見てくれ。検屍は済んで、片付けるばかりのところだ」
中へ入ると、泣き濡れたお秀が、ろくな身寄もないらしく、二三人の近所の衆に助けられて、形ばかりのことを整えております。

「気の毒なことになったな、お秀」

平次は痛々しい娘姿に目礼して、屏風びょうぶの中の死体に近づきました。

「あの通りだ。刃物が手近にあれば、自殺と間違えるところを——ずいぶん捜して見たが刃物は中にない」

喉笛のどぶえを掻き切られて、半身紅あけに染んだ死体は、見る目も凄まじい限りです。

「お秀はいなかったのか」

「ゆうべも小田原町の叔母のところへ手伝いに行つて、けさ遅く帰つて来てこ

れを見付けたのさ」

金六は泣きじゃくるお秀に代って答えました。

「戸は開いていたのか」

「え、表は締りがありませんでした」

お秀はようやく顔を挙げます。

「あの窓は？」

平次は、三間ばかり向う、的の横に開いた川に面する窓を指さしました。

「開いていました。蒸し暑い晩でしたから。でも、あすこからは入れません」

お秀の言うのを背後に聴いて、延び上がって高い窓から覗くと、川から切ったような羽目板で、手がかりも足がかりもありません。

「書置きも何んにもないんだね」

「え」

平次が死体の側へ戻ると、金六は眼顔に物を言わせて、それを物蔭に誘います。

「どうした、洲崎の」

「死体の側に、こんなものがあつたんだよ」

金六が懐ろから出して見せたのはその頃では申分のない贅沢とされた、黒羅紗らしやの懐ろ煙草入、銀延ぎんのべの細い煙管まで添えてあつたのです。

「こいつは？」

「紋次郎の持物だ。間違いはない。自慢の品で深川中で知っている。——それが死体の側にあつたんだぜ——少し血が附いて」

「血が附いて？」

「この辺さ」

金六は死体の側に戻って、畳の上を指さします。凄まじい血潮の中に手廻り

の道具と、商売物の楊弓が一挺、血に染んでいるのも哀れ深い風情でした。

「この楊弓を誰が擱つかんだんだ」

平次は、楊弓の端っこをつまみ上げました。

「八丁堀の旦那かも知れない」

「これを擱つかんだら、手へ血が附いたろう」

「そんな様子もなかったが」

「ところで、兄あにい哥の見込みは？」

改めて平次は金六に訊きました。

「紋次郎を縛ったものか、どうか。相談しようと思つて兄あにい哥に来て貰つたんだが」

「外に証拠は？」

「きのう薄暗くなるころ、紋次郎は半助に逢つているんだ」

「ここへ来たのか」

「そうだよ。本人に訊くと——半助が相談があると言うから行つたが、お秀とより、を戻して店の立ち直るまで資本を百両貸してくれというから、そんな金は部屋住みで出来るわけではないし、お秀との仲もお千勢とのことがあつた後で、世間の口がうるさいから、暫くそつとしておいて貰いたい——と体よく断つたと言うんだ」

「フーム、煙草入のことは？」

「それも訊いたが、そのとき忘れて来たかも知れないが。気が立っているから思い出さなかつた、どうせ伊達煙草だ、なくとも不自由をしないからという逃げ口上さ」

「一応筋は通るが——」

平次は深々と考え込みました。

「物事がこんがらかると面倒だから、この辺で紋次郎を縛ったもんじゃあるまいか」

「さア、——側に刃物があれば、間違ひなく自害なんだが——」
そんなことを平次は考えているのでしよう。

「殺しだって、少し働きのある奴なら、却かえって刃物を置いて行くかも知れないよ」

自殺に見せる細工は、この場合立派に成り立ちます。

「でも、紋次郎を縛るのは早過ぎるようだ。あの男には、人など殺せそうもない。とにかく、山城屋へ行って調べて見ちゃどうだ」

「無駄だよ、相変らず家中の口が揃っているんだ。——若旦那は風呂へ行って帰ったきり、店から一と足も動かないとな。あの家の人間は、手洗ちょうずにも行かないような顔をしやがる」

金六はブリブリしております。

七

「親分、もういちど行って見て下さい」

その翌る日、深川へ様子を見にやった八五郎は、こんなことを言いながら帰つて来たのです。

「どうなんだ、八」

「金六親分はとうとう紋次郎を縛ってしまいましたよ。二度目だから、山城屋ではそれほど驚きもしないが、可哀想にお秀はまだ紋次郎に未練みれんがある様子で、あつしを蔭へ呼んでそつと手を合せるんで」

「御用聞冥利みょうりだ。あんな可愛い娘に拝まれたら、悪い心持じゃあるめえ」

「からかつちやいけません。——ね親分。お秀は、お願いだから、もういちど銭形の親分に逢わせて下さいって。——へッへッ、姐御の手前少しばかり悪いような気がするが、お秀が逢いたがっているのは親分ですよ」

「馬鹿野郎」

そう言いながら平次は、仕度もそこそこに八五郎といっしょに三度目の深川に向いました。

最初金六に逢って見ましたが、紋次郎を縛った手柄に陶酔とうすいして、こんどは平次の言うことなどを耳にも入れず、少しは痛め付けても、今日中に口書きを取ろうとあせっている様子です。

お秀のところへ行くと、

「あ、銭形の親分さん、——山城屋の若旦那を助けてあげて下さい。あの方に人なんか殺せる訳はありません。——それに、父さんはこの間から口癖の様に、

死にたい、死にたいって言いつづけていました」

「——」

「こんな業病ごうびょうに取付かれて、お前に難儀をさせるし、治る見込みもない。店はだんだん寂さびれて、この盆には否も応もなく夜逃げでもしなきやなるまい——と言っていました」

「で？」

解ほぐれる様に語るお秀、それを迎えて平次は優しく促うながしました。

「二三日前にも、何を考えたかあいくちヒ首なんか出していました。危ないから私が取り上げて隠しておきましたが、先刻見ると、箆筒たんすの抽斗ひきだしの底に鞆さやだけあって、中身はどこへ行ったか見付かりません」

お秀は帯の間から真っすぐに伸びた、ヒ首の白鞆を出して見せるのです。この中身なら柄えを加えて一尺近い業物わざものだったでしょう。

「お秀さん」

「ハイ」

改まった平次の顔を、お秀は恐る恐る見上げました。

「俺にはだんだん判って来たような気がする。——が、本当のことが判ると、お前は困ったことになるかも知れないよ」

「困ったこと？」

「父さんの曲った望みを、すっかり駄目にした上、お前は世間へ顔向けができなくなる——」

平次はそれだけのことを言つて、お秀の答えを待ちました。

「構いません。——父さんは、病氣やら苦勞やらで、色々よくないことを考えていました。曲ったのぞみというのはお隣の小母さんや山城屋の若旦那をひどい目に逢わせることじゃありません」

「お組や紋次郎は、あの通りひどい目に逢っているよ」

「私はどうなつても構いません。死んだ父さんの悪いのぞみを遂げさしては、却つて冥途めいどの障りとやらになるでしょう。——その代り私は尼にでもなつて父さんにお詫びします。——若旦那を助けて上げて下さい。お願いで御座います」

お秀は平次の前に身を投げて、ひた泣きに泣くのです。

「それ程の決心なら、俺の考えたことだけをやって見よう」

平次はその日のうちに人を雇つて、お秀の家の窓下の川二間四方ほどのところを丁寧にさらに漉きました。

その作業は決して楽なものではなかったにしても、幸いの干潮を利用して、日暮れ近くなつてから、泥の中に落ちていた細い匕首の中身——柄つかごと一尺近いのを捜し当てたことは言うまでもありません。

その晩、お秀の家に金六を呼んで、八五郎とお秀と立会わせ、平次は血染の

楊弓に川から拾った細い直刃すぐばのヒ首をつがえて射て見せました。

「あの通りだ。俺がやっても三間以上は飛ぶ」

平次は的の前に落ちたヒ首を指さしながら続けます。

「半助はお千勢殺しが露見して、明日にも縛られそうになったのと、自分の身体が長く生きられそうもないと知って、自殺の覚悟をきめた。——が、唯死んではつまらないと思つて、紋次郎を呼んで、最後の望みを持出して見たが、紋次郎に断られてカーツとした眼に、紋次郎が忘れて行った煙草入れが映ると、急に恐たくしい企たくらみを思い付いたのだろう」

「——」

「幸いお秀は小田原町に行って留守、——半助は煙草入と楊弓を前に置いて、喉笛を掻き切った上、人間離れのした骨折りで、苦しい息を我慢して、血染のあいくちヒ首を楊弓で射飛ばした。死にかけていても、楊弓の腕前は確かだ。血染のヒ

首が開けたままの窓の外へ飛んで行くのを見窮めて半助は死んだのだろう」

「――」
あまりの恐しい企らみ、しかも疑いを容るる余地もない平次の調べに、聴き入る三人はぞっと身に迫るものを感じます。

行燈あんどんが点いても、窓にはまだ残る夕映ゆうばえ。一昨夜はそこから血染のヒ首が蛇のように飛んだのでしよう。

「お秀さんの望みで、俺はこれだけのことを調べ上げた。子として親の非を発あほくのは本意ではあるまいが、――親の非を遂げさせるよりは、人の道にも叶かなうだろう。今では仏になった父親の半助も、自分の罪を償つぐなってくれたお秀の志を喜んでいるに違いない。――あの通り、お秀の健気な心持を見ると、俺も泣かされてしまったよ」

指したお秀の頭、気が付いて見ると鬚まげの根から短く切って、一つ振ると、鬚びん

の毛がバラリと頬へ下がります。

×

×

事情を聴いて、山城屋の紋兵衛父子も、強たつてお秀を嫁にと望みましたが、お秀は堅く辞退して、あわれな恋を墨染の袖に包んだまま、鎌倉の尼寺に入つたということでした。

「驚いたな、どうも」

ガラツ八は思い出しては、それをもつたいないことにしております。

「あんな結構な新造は滅多にないぜ。ね、親分」

「諦しめろよ八、お秀は二度と娑婆しゃばつ気を出す気遣いはない。親父の企たくらみは恐し過ぎたし、あの娘はよく出来過ぎたよ」

平次はつくづくそう言うのです。

(編注)

底本には（『お藤は解く』第三巻参照）の注記はありませんが、河出書房版全集所収の他の作品に準じて注記を補いました。

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十六年七月号 文藝春秋社

底本——「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>